

穂屋祭了る

宮坂静生

祭了る一句

穂屋仕舞ひ旬を過ぎたる花ばかり
燈籠を沈めるごとく仕舞ひけり
秋色の浅間山どつかと仏貌
とんねるに電車の入る厄日かな
落鮎の腹にぼつくり潜みたし
羊腸と谷道のわが九月かな

高山へ

谷底の水澄む須臾を愉しめり
飛驒の家框柱の涼放つ
戦後七十年露草の実のざくざくと
紅天狗茸ミサイルが宙をとび
草の絮ねむり足らひしとき持たず
九月尽烏真白き尿を撒き
風景は横に切るもの林檎熟る

